赤ちゃんの四季（62）　平成28年夏

増加し続ける発達障害が大きな社会問題に

発達障害などのため通常の学級で学びながら一部の授業を別の教室で受ける「通級指導」の対象となっている小中学生が全国で９万人を超え、これまでで最も多くなったという文部科学省の調査結果が最近報道されました。

発達障害とは、先天的な脳の神経発生・発達の障害ですが、この発達障害に分類される精神疾患には、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などがあります。米国では、その代表格である「自閉症」の患者数が４０年間で７０倍に増加し、６８人に一人が自閉症患者ということになります（２０１４年の米国疾患管理予防センターのデータから）。

この増加の理由として診断基準の変化もありますが、何よりも発達障害に対する社会の関心が高まってきたことです。子どもだけの問題であった発達障害が、今日では大人の問題ともなっています。昔は、農業や製造業といった自分一人で仕事のできる場が多くあり、他人とのコミュニケーションが苦手な人でも就労できましたが、現代社会ではサービス業をはじめとする第三次産業の占める割合が高く、就労の場が限られていることが大いに影響しています。

前回のこの欄では、「子宮内環境が生活習慣病に関係する」ことに触れましたが、「自閉症」の原因としても子宮内環境が大いに関係しているようです。これまで母体の高齢と胎児発育の異常との関連性が指摘されてきましたが、「自閉症」のリスク因子としては母体年齢よりも、父親の加齢が関係しているとするデータが最近相次いで発表され、注目を集めています。

私たち小児科医は、発達障害をもつ子どもたちを早期に診断し、その原因を究明するとともに、子ども一人一人に応じた育て方をご両親と共有しながら、子どもたちが生き生きと前向きに生活できる場を探し続けています。